

総 説

第40回地盤工学研究発表会（函館大会）を終えて

三田地 利 之（みたち としゆき）

第40回地盤工学研究発表会実行委員長
北海道大学大学院教授 工学研究科

1. はじめに

第40回の節目を迎えた地盤工学研究発表会函館大会を無事終えることができました。これもひとえに、全国から参加された会員諸兄、大会運営を支えていただいた地元函館市をはじめ国・道などの関係各機関や企業各社、さらに支部会員はもちろん学会本部の方々の並々ならぬご協力のおかげであり、心から御礼申し上げます。

北海道での全国大会の開催は5回目ですが、最初の3回は札幌市で開催。前回第30回大会は、土質工学会から地盤工学会に改名（平成7年5月）後の最初の大会で、北見市で開催されたことは会員の皆様の記憶に新しいところかと存じます。前回はそうでありましたが、今回も会員の皆様にできるだけ道内の異なる地域の地盤とその文化に触れていただく機会にしようという基本的な考え方で、開催地を函館市に決めさせていただきました。後述のように、発表件数が大幅に増えたことと、今大会で導入した新企画が多かったせいもあって、最終的に四つの建物を使用することにならざるを得ないという誤算もありました。しかし、結果として大きなトラブルもなく成功裡に大会を終える事が出来たものと考えておりますが、会員の皆様の評価はいかがでしょうか。

2. 大会準備の基本方針と新企画

今大会を北海道支部で開催するにあたり、以下のような基本方針のもとに準備を進めました。

- 1) 学会の原点としての行事に重点をおき、支部の力で出来る範囲の事を行うこととし、華美にならないように身の丈にあった大会とする。
- 2) 一方で、積極的に新しい企画を取り入れるとともに、大会運営上必要な新しい手法を思い切って導入する。
- 3) 地元函館市に研究発表会開催の経験ある会員が少ないことから、札幌を中心とした全道の会員による協力体制を作るとともに、経費節約のため、現地開催が不可欠な場合を除いて、企画・準備のための各部会の会議は可能な限り札幌で開催することとする。

以上の方針のもと、通常の行事に加えて今大会では以下のような新たな企画が導入されました。

① 技術者交流特別セッション

本特集号に詳細な紹介がなされていますが、日本緑化工学会・地域安全学会・日本情報地質学会に本大会の三

つのセッションを無償で提供し、最後に当学会も入った四つの学会によるディスカッションを通して、技術者相互の交流を図ろうというものです。

② 新潟県中越・福岡県西方沖地震特別セッション

この数年大規模地震災害が続いておりますが、特に昨年10月の新潟県中越地震および本年3月に発生した福岡県西方沖地震の際には、地盤工学会として緊急災害調査団を派遣するとともに、災害調査委員会を発足させていることから、この二つの大地震における調査結果の報告を目的とした特別セッションを設けました。

③ 平成16年度学会賞受賞者講演

昨年の新潟大会では、学会賞の表彰式が初めて全国大会の場で行われることになり、特別講演会の後に実施されましたが、今回は表彰式自体は従来どおり5月の総会（本部：JGS会館）で行い、受賞者による講演のためのセッションを設けました。

④ 若手優秀論文発表者の表彰

若手研究者の志気を高め、参加者の増員と研究発表会の活性化を目的に、優秀な論文を発表した20代の発表者を対象に、各セッションから1名を選出し、「研究発表会優秀論文発表者賞」として表彰することとしました。

⑤ 液晶プロジェクターの導入

大会運営の技術面での新たな展開として、すべての発表に液晶プロジェクターを導入しました。他の多くの学会ですでに実施されてはいますが、プロジェクターとコンピュータソフトとの関係、主催者側の準備すべきことと発表者の守るべき条件の徹底、万が一の場合の対応等々、周到な準備と経費が必要（従来方式に比べて大会総支出の3%増）であり、この方式に踏み切ったのは、開催支部として大きな決断でありました。なお、パソコンと液晶プロジェクターのすべてをレンタルするとさらに経費がかさむことから、本大会では道内の関係各機関からプロジェクターを借り集めることで対処することとしました。

観光都市函館での開催であり、ホテルの心配はないものの、発表会場の収容能力に関しては当初から懸念材料ではありました。新しい企画の導入によるセッション数の増大に加えて、後述のように発表件数が大幅に増えたことから、結果として13会場に膨れ上がり、四つの建物に分散することとなりました。

3. 大会開催状況

本研究発表会では、過去最多の1 359件の論文発表が

あり、参加登録者数は有料登録者（地盤工学会会員）2 096名、技術者交流特別セッションに参加された3学会の会員15名、計2 111名となり、昨年をわずかに上回りました。発表件数の増大に対しては、建物の数を増やし、当初の使用目的を変更して会場に仕立てるなどの工夫をするとともに、2日目の午後に2セッション設ける（従来1セッション）ことで対処しました。特別講演会とその後の交流会を同じホテル内で開催することによって移動時間を少なくすることで可能になったものであり、プログラム編成担当者の知恵と努力の賜物であります。

発表件数や参加者の増加は想定範囲内ではありましたが、大会期間中雨と風に悩まされることなど全くの想定外であり、この時期の北海道としてはきわめて珍しいことでした。前述のように4箇所に建物が分散していることもあって、参加者の方々にご不便をおかけしたことが、心残りであります。

「技術者交流特別セッション」では、最初の3セッションは日本緑化工学会・地域安全学会・日本情報地質学会がそれぞれ運営し、最後に地盤工学会主催のパネルディスカッションとして、「新しい地圏環境を探る一環境・安全・情報」をテーマとしたディスカッションが行われました。何しろ初めての試みであり、会員の皆様の反応はどうであるか、セッションの運営をスムーズに運べるかどうか、いささか心配でありました。しかし、いざスタートしてみればこれらは杞憂に過ぎず、延べ参加人数322名は、並行して行われた13会場中の最多を記録したことから、会員の関心度の高さを示すものと受けとめられますし、最後のセッションでは4学会の会員による活発なディスカッションが行われ、今後とも緩やかな連携を続けようとの確認がなされました。

「新潟県中越・福岡県西方沖地震特別セッション」は大会第3日の朝から連続する4セッションを使って開催され、活発な質疑が行われました。早朝から多数の参加者を迎え、最も多い時には、並行して実施された他のセッションの3倍の180名の参加者があり、立ち見が出て急きょ椅子を搬入したほどでありました。

各会場のセッション数は初日が5コマ、2日目・3日目が4コマですが、延べ参加人数は初日が3 800名、2日目3 350名、3日目が2 800名と最終日まで多数の参加者があり、総計で10 000名に届くほどの数に達したのは、前述のように新しい企画を積極的に取り入れたことの成果の一端を示すものと自負しております。

「高田屋嘉兵衛と近代経営」と題する特別講演は一般市民も含めて200名強の参加者を得て、高田嘉七氏によるユーモアあふれるご講演を通じて、江戸時代の豪商高田屋嘉兵衛の活躍ぶりとその人柄をご子孫のお言葉から直接伺う貴重な機会となりました。

技術展示は、会場の都合で39ブースに制限せざるを得ず、締切り期日後にお申し込みいただいた一部の企業についてはお断りせざるを得ませんでした。主会場に近接していたこともあってか、来場者は初日1 340名、2

日目1 500名、3日目680名、総計3 520名と盛況のうちに開催することができました。ここに改めて関係各位に厚く御礼申し上げます。

交流会には341名の参加者があり、北海道の海と大地の恵みを味わいながら、歓談のひとつきを過ごしていただきました。

見学会は函館市内の土木遺産を巡る半日コースと、有珠山の火山遺構と復興状況を見学ののち新千歳空港を経由して札幌に向かう1日コースの二つが実施され、後者は天候に恵まれて、さわやかな空気の下で見学を楽しんだのち、それぞれの帰路についていただきました。

学会賞受賞者による講演は2日目の午後に実施されましたが、並行して行われている通常のセッション以上の参加者を得て、盛会裡に終了しました。来年度以降も、このような形式で実施すべきとの感触を得ました。

今大会でも従来同様数多くのディスカッションセッションが設けられました。このところ地盤災害が頻発していることを反映して「2003年十勝沖地震地盤災害」や「H16年新潟・福井・四国・関西豪雨災害調査合同報告会」のセッションには120～180名と多数の参加者があり、活発な意見交換が行われました。また、一般公開として行われた「男女共同参画社会における地盤工学会の今後の活動」のセッションでは、既に各界でご活躍の女性講師の特別講演に加え、学生から社会人まで女性ばかりではなく、上司、同僚、部下さまさまざまな立場からの意見交換がなされました。

第40回の研究発表会を記念して、今回から優秀論文発表者表彰制度が導入され、各セッションの座長からの推薦を受け、調査・研究部で審議決定した117名の受賞者に賞状が送られました。

前述のように、13会場のすべての発表において液晶プロジェクターを用いました。地盤工学研究発表会としては初めての経験であり、多少のトラブルはあったものの、特に批判も聞かれなかったことから、ごく自然に受け入れられたのではないかと受け止めております。

4. おわりに

今大会における諸行事の企画・実施にあたっては、実行委員会の各位、各部会の委員、および学会本部をはじめとする関係各位の多大なご協力をいただきました。ここに改めて厚く御礼申し上げます。

今大会で新規に導入した企画はいずれも成功裡に実施できたものと考えております。中でも「技術者交流特別セッション」は当学会の今後のあゆみに少なからぬ影響を与えるものと予想されます。来年度も実施の方向で早くも準備を開始されたと聞き及んでおりますが、さらなる発展を期待しております。

最後になりましたが、来年の鹿児島大会が実りある大会となることをお祈り申し上げます。

（原稿受理 2005.9.5）